

# 京都大学教育研究振興財団助成事業 成 果 報 告 書

平成 30 年 11 月 19 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 白眉センター/大学院文学研究科

職 名 特定准教授

氏 名 藤原 敬介

助成の種類	<b>平成 30 年度 ・ 国際会議開催助成</b>			
国際会議名	第51国際漢蔵語学会			
開催期間	平成30年9月25日 ～ 平成30年9月28日			
開催場所	京都大学吉田キャンパス			
参加者	総数 100人	内 訳 基調講演者3名(3件) ポスター発表3名(3件) 一般発表65名(68件) 一般聴講者29名 (全100名のうち海外からの参加者58名)		
成果の概要	<b>タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/>無 <input type="checkbox"/>有( )</b>			
会計報告	事業に要した経費総額	<b>2,439,369 円</b>		
	うち当財団からの助成額	<b>1,000,000 円</b>		
	その他の資金の出所	<small>(機関や資金の名称) 鹿島学術振興財団国際研究集会援助、京都文化交流コンベンションビューロー「小規模MICE開催支援助成金」「京都らしいMICE開催支援補助制度」、大会参加費、懇親会参加費</small>		
	経費の内訳と助成金の使途について			
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)	
	旅費	401,980	0	
	宿泊費	385,700	385,700	
	会場費	213,343	115,323	
	会議運営費	190,339	190,339	
	大会運営費	400,062	308,638	
雑費	41,685	0		
懇親会関連費用	806,260	0		
当財団の助成について	<p>(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)</p> <p>本大会のような低予算の学会にとって、京都大学教育研究財団の助成はまことにありがたいものでした。おかげさまで、若手研究者への宿泊費補助と託児サービスが可能となったほか、大会運営にかかわる経費もまかなうことができました。</p> <p>今後とも、この助成金が有意義に使用されていくことを希望いたします。一点もうしあげるならば、ポスターや予稿集で助成金について言及しやすいように、公式の英語名称や中国語名称があれば、大会参加者への説明にも便利であるとおもいます。</p>			

## 成果の概要／藤原敬介

第 51 回国際漢蔵語学会 (The 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics) は、2018 年 9 月 25 日から 28 日にかけて京都大学吉田南キャンパスで開催された。海外からは中国、台湾、香港、マカオ、シンガポール、オーストラリア、インド、イスラエル、ノルウェー、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカという 13 の国や地域の大学・研究機関等から計 58 名、日本からは計 42 名が参加した。このうち海外からの発表者は 50 名、国内からの発表者は 21 名であった。9 月 25 日に 3 件のポスター発表と、フランスにおけるビルマ言語学の泰斗である故 Denise Bernot 教授の研究足跡をたどった映画 “Denise Bernot: Langues, Savoirs, Savoir-fair de Birmanie” が上映された。翌 9 月 26 日から 9 月 28 日までは、毎日 1 件の基調講演と、合計 68 件の研究発表がおこなわれた。

基調講演者と題目は以下のとおりである。いずれも録画され、将来的には京都大学 OCW として公開される予定である。

- 26 日 : Justin Watkins 教授 (ロンドン大学 SOAS)  
“The digital fate of Sino-Tibetan languages in Myanmar”
- 27 日 : James A. Matisoff 教授 (カリフォルニア大学バークレー校)  
“Morphosemantics of the Proto-Tibeto-Burman \*a- prefix: glottal and nasal complications (with an Appendix offering analogies with the English preformative a-)”
- 28 日 : 孫天心教授 (中央研究院)  
“Identifying Tibetic Subgroups: A Case in Khrochu (Sichuan)”

研究発表は 2 つないし 3 つの会場にわかれておこなわれ、音声学・音韻論、形態論、統語論、意味論、類型論、社会言語学、語用論、歴史言語学、フィールド調査報告など、漢蔵語学にかんするあらゆる分野について、最新の研究成果が披露され、活発な質疑応答がおこなわれた。

今大会には特筆すべき点が二つあった。ひとつは予稿集を事前に用意したこと、もうひとつは若手研究者をできるだけ支援したことである。

まず予稿集の作成についてのべる。国際漢蔵語学会が 1968 年にはじまった当初は、参加者がそれほどおおくはなく、参加者全員がすべての発表論文に目をとおして質疑応答するという形式であった。しかし、規模がおおきくなり、パソコンの使用が普及するにつれて、同時に複数の会場にわかれ、配布資料なしのパワーポイントによる報告が近年は主流をしめていた。今大会では、学会創設当初の精神にたちかえり、事前に予稿集を作成した。ほぼすべての発表者から原稿が提出され、1085 頁におよぶ予稿集ができあがった。

これだけ大部のものは印刷できないので、事前にダウンロードするように周知した。予稿集を参照しながら聴講していた参加者は少数であったけれども、大会に参加できなかった人も発表内容を知ることができるという点をとっても、予稿集作成には意味があった。

次に若手研究者支援についてのべる。国際漢蔵語学会は、これまで欧米中心に開催されてきた。近年は中国での開催も増加したけれども、中国での大会では中国語が中心となり、非中国語話者には参加が困難であった。しかし、欧米に留学し、英語やフランス語に堪能であり、研究能力もたかい若手中華系研究者が輩出し、多数参加していたことにはおどろかされた。10年後には、彼らが斯界の中心となっていることを予感させた。助成金を使用して彼らの京都滞在を援助することもできた。日本からも多数の大学院生が発表することを期待したけれども、三名だけだったのは残念であった。幼児とともに参加する研究者に対して、助成金を使用して託児サービスを提供できたこともありがたかった。育児をしながらでも学会に参加できるということで好評であった。

今大会は、科研費に依存せず、参加費を低額におさえ、低予算で運営する方針であった。科研費は、研究そのものあるいは次世代育成に対して使用すべきであって、功なり名をとげた著名研究者の招待や会場費等に浪費すべきではないとかがえるからである。さいわいにして、京都大学教育研究振興財団をはじめとして、国際学会開催に特化した助成金を複数いただくことができた。お金の心配をせずに大会を運営することができたことに感謝したい。

なお、第52回国際漢蔵語学会はオーストラリア・シドニー大学で2018年6月に開催される予定である。